

思いや意図を表現する子供が育つ音楽科の授業

I 主題設定の理由

近年は、グローバル化の進展によって、国境を越えたつながりが一層加速している。これからは、様々な価値観をもった人々同士が、感性を働かせながら協働していくことが期待されている。音や音楽に対する感じ方は、人によって多様であり、創意工夫することで多様な表現ができる。そこで、他者とともに表現を創り上げる体験を通して、音楽のよさや美しさを共有することが、今、音楽科に求められていることであると考えた。

また、中学校音楽科の次期学習指導要領では、「思考力・判断力・表現力」の育成に関する目標に「音楽表現を創意工夫することや、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにする」とある。それに伴い、思いや意図を表現したり、楽曲のよさや美しさを味わって聴いたりすることを通して、知識・技能を習得し、活用することが重視されるようになってきた。

そこで、本校音楽科では、思いや意図をもち、表現を創意工夫していく活動を協働的に行うことで必要とされる技能について気付き、より主体的・創造的に活動ができるのではないかと考える。

前研究では、「創意工夫してよりよい表現をすることができる子供」を研究主題とし、表現について考え、繰り返し練習に取り組ませることで、表現意図を表すことができるようになることを考え実践に取り組んできた。その結果、「試行錯誤するポイント」^{※1)}を基に練習を重ねようとする姿が多く見られるようになってきた。また、音楽を形づくっている要素と要素同士の関連について知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながらよりよい表現を追究することができるようになってきた。しかし、楽曲分析でつかんだことを、「『表現のめあて』^{※2)}の設定」や表現に十分にいかすことができない姿も見られた。これは、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連について知覚することはできたが、創意工夫する際につなげることができていないことが原因であると考えた。そのため、音楽を形づくっている要素の働かせ方について実感を伴わせる必要があった。

そこで、本研究では、音楽的な見方・考え方である、音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化など関連付け、実感を伴わせることで「表現のめあて」をどのように決定していくとよいのかを明らかにし、必要な知識・技能を習得して思いや意図を表現することができるような手立てを探っていく。

以上のことから、研究主題を「思いや意図を表現する子供が育つ音楽科の授業」と設定した。

II 研究の概要

1 音楽科の目指す子供像

思いや意図を表現する子供

ここでいう「思いや意図を表現する子供」の姿とは、自分がどのような表現をしていきたいのか

という思いや意図を音楽で表現できる状態や、根拠をもって自分なりに音楽のよさや美しさを言葉で表現できる状態を指す。思いや意図をもたせる際には、曲想を感じ取ったり、音や音楽に対するイメージを膨らませたりすることで、多様な音楽に対しての解釈や理解を深めたり、曲にふさわしい表現につながるようにさせることが大切である。その際に、音楽の要素や要素同士の関連とそれらの働きから感受した特質や雰囲気、歌詞の内容、楽器の特徴などを子供たちに捉えさせることが必要である。

2 育みたい資質・能力

音楽科における目指す子供像に近づけるために、以下のような資質・能力を育む必要があると考えた。

- 楽曲分析する力
- 「表現のめあて」を決定していく力

楽曲分析する力とは、音楽の要素とそれらの働きから生み出されて感受される特質や雰囲気を表す曲想との関わりを捉える力のことを指す。また、「『表現のめあて』を決定していく力」とは、思いや意図を、音楽の要素をどのように働かせて表現するのかを捉える力を指す。

これらの資質・能力を育てていくことで、子供たちは、音楽科が目指す子供像に近づくことができるようになる。

3 資質・能力を育むための手立て

題材を「つかむ場」「つくる場」「ふりかえる場」の三つの場で構成し、授業を進める。そして、拡散的思考と収束的思考を働かせる場面を位置づけることやメタ認知を促進させることで、思いや意図を表すことのできる「表現のめあて」にさせていく。

「つかむ場」は、「つくる場」の教材にいかすことのできる楽曲を用いて楽曲分析を行わせ、「試行錯誤するポイント」となる音楽の要素とそれらの働きから生み出されて感受される特質や雰囲気と曲想との関わりについてつかませる場である。まず、教師が本題材における「表現の課題」^(注3)を知らせる。それを達成するための音楽の要素となる「試行錯誤するポイント」を伝えたり、作曲者の意図や楽曲の背景を知らせたりすることで、焦点を絞って楽曲分析することができる。その際に、全体で意見交換させたことを、教師が板書にまとめることで、曲想と音楽を形づくっている要素との関わりをつかませていく（「モニタリング」）。最後に、鑑賞文を書かせたりプレゼンテーションをさせたりすることでまとめとする。

「つくる場」は、「試行錯誤するポイント」を基に、試行錯誤し実感を伴わせながら、思いや意図を実現するための「表現のめあて」を決定していく場である。

拡散的思考を働かせる場面として、まず、表したいことを個人で想起させ、グループや全体で意見交換させる。そして、「試行錯誤するポイント」をどのように働かせれば、思いや意図を表現できるのかについて、グループで試行錯誤し実感を伴わせながら、個人やグループで「表現のめあて」を設定させる。次に、ペアやグループで鑑賞し合う機会を設け、その際に拡散的思考を適切に働かせるためのメタ認知の促進として、「試行錯誤するポイント」がいかにされた表現であるのかや他の表現はないかどうか問い掛け、意見交換させる（「モニタリング」）。

次に、収束的思考を働かせる場面として、「試行錯誤するポイント」を基に、ペアやグループ

の意見交換で伝えられたアドバイスと自分の考えを比較させる。その際に収束的思考を適切に働かせるためのメタ認知の促進として、伝えられたアドバイスと自分の考えを比較しながら「表現のめあて」を見直すように促したり、必要に応じてICT機器で録音や録画した表現を客観的に振り返らせたりすることで、「試行錯誤するポイント」がいかされた「表現のめあて」になっているか見直させ決定させていく（「モニタリング」）。

「ふりかえる場」は、創意工夫についてどのように学び、それを「表現のめあて」の決定にどのようにいかすことができたのかを振り返らせ、拡散的思考と収束的思考を働かせる場面が有効であったかについてワークシートに記述させる。また、思いや意図を表すために「試行錯誤するポイント」がどのように効果的であったのかについて振り返らせ、それが他のどのような場面で生かすことができそうであるかを、ワークシートに記述させる。（「リフレクション・モニタリング」）そうすることで、深い理解を伴った知識・技能を習得させることができると考える。

場	つかむ場	つくる場		ふりかえる場
活動	楽曲分析	「表現のめあて」設定→表現→「表現のめあて」決定		まとめ
思考		拡散的思考	収束的思考	
メタ認知	「モニタリング」	「モニタリング」	「モニタリング」	「リフレクション・モニタリング」

【題材の主な流れ】

4 資質・能力が育まれたかの評価について

「楽曲分析する力」，「『表現のめあて』を決定していく力」ともに，学習プリントの記述内容から見取る。また，子供の変容を見取っていくに当たり，全体傾向を捉えつつ，その補助的資料として抽出生徒を設定する。

5 2年次のねらい

場の設定を見直し，流動的に試行錯誤させ，実感を伴わせることで，育みたい資質・能力である「楽曲を分析する力」「『表現のめあて』を決定していく力」が子供たちにどの程度身に付いたかを評価し，手立ての有効性を検証する。

注1) 教師が示す，題材で取り上げる楽曲において重要と考える音楽を形づくっている要素を基としたポイント。

注2) 自己の表現意図と，それを実現させるための表現の仕方（音楽の要素の働かせ方や奏法）について文章で書き表したものを指す。

注3) 教材として取り扱う曲で創意工夫して表現をしていくに当たって，子供たちに達成させたい課題である。

参考文献

文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年6月）解説－音楽編－』教育芸術社，2017年

副島和久『新学習指導要領の展開 音楽編』明治図書，2017年

久保田慶一『2018年問題とこれからの音楽教育 波動の転換期をどう乗り越えるか？』ヤマハミュージックメディア，2017年

小山英恵『フリッツ・ヴェーデの音楽教育－「生」と音楽の結びつくところ』京都大学学術出版会，2014年

齋藤寛『心を動かす音の心理学 行動を支配する音楽の力』ヤマハミュージックメディア，2011年

須藤貢明・杵鞭広美『音楽表現の科学 認知心理学からのアプローチ』アルテスパブリッシング，2010年